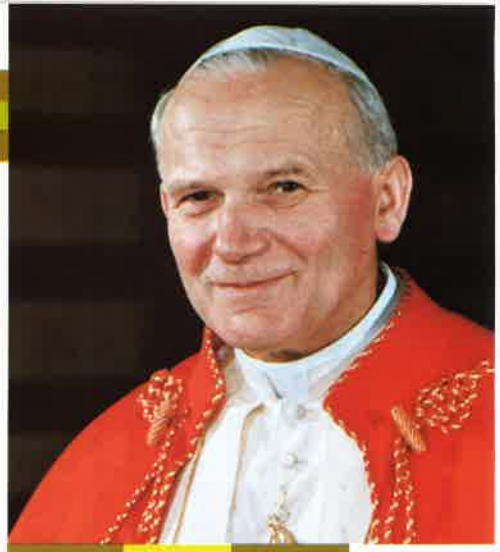
8
平成2年(1990年)8月10日　教皇様の聲　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
AUGUST, 1990
毎月10日発行　第124号



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

聖母の被昇天

お告げの後、処女でありながら神の御子の母となり、エリザベトの世話をするためザカリアの家を訪れた時ほど、マリアが我を忘れて叫ぶことができた瞬間を他に見つけることはできないでしょう。

「私の精神は、救い主である神により喜びおどります。(…)全能の神が偉大なことをされたからです。その名は清く(…)」(ルカ2・46、49)

永遠のみことばの母となった無原罪のマリアがこの言葉を口にした時そうするだけの充分以上の動機がありましたが、きょう被昇天を迎えるにあたりそれが頂点に達すると言えます。エリザベトが称えるほど厚い信仰をもつマリアは、あの瞬間、いまだ神秘の覆いに包まれたままとはいえ、聖三位一体の聖櫃に入りました。しかし今日は、永遠の住い、すなわち御父と御子と聖霊との真に親密な交わり、(顔と顔)を合わせる至福直観の生活に入ります。完全な愛の尽きぬ源であるこの直観は、マリアの霊魂と体を栄光と幸せで満たしました。というわけで、被昇天は、神の母となるため全人類の中でただ一人マリアが受けた特異な召し出しとマリアの全生涯の冠ともなります。お告げの間に(恩寵に満ちた)マリアが示し、また聖母の御訪問中に従姉妹エリザベトが特に称えたマリアの信仰、その信仰の冠となるわけです。

私たちも黙示録の言葉を繰り返すことができるでしょう。「そうして天では神の神殿が開け、その中に契約の櫃が見えた。(…)その時、私は天にとどろく声を聞いた。『神の救いと力と国とそのキリストの権威はすでに来た。』」(黙示録11・19、12・10)

常に主のはしためでありたいと望んだ御方のうちに神の国が現存しています。それは、注油された方キリストの力、主が地上にもたらされた火のような力(ルカ12・49参照)、(なれかし)の言葉でキリストを人としてこの世にもたらした御方が栄光を受けた時に啓示された力、無原罪の御方を称える時に現れる力、御母が栄光を受けたときに啓示された力のことです。

「キリストは死者の中から復活し、死者の初穂となられた。一人の人間によって死が来たように、一人の人によって死者の復活も来た。すべての人がアダムによって死ぬように、すべての人はキリストによって生き返る。しかしそこに順序があり、まず初穂であるキリスト、次に、来臨のときキリストの者である人々が続く。」(コリント①15・20〜23)

マリアの被昇天は復活された御方の御母に対する特別の賜です。「キリストの者である人々」が主の再臨のとき生命を得るのであれば、まず第一に主の母であるマリアが死に対する勝利にあずかるのは、まことにふさわしいこと、理にかなったことです。(キリストの者)である聖母は、事実もっとも完全な意味でそうであるからです。子が母に属するように、キリストは聖母に属するからです。また、マリアはキリストに属し、特別な意味で(キリストの者)です。なぜなら、マリアは他に例を見ない特別な仕方で愛され、また贖われたからです。母の胎内に宿った時から無原罪であった御方(死の原因である罪を免除されていた御方)が、同じように死をも免除されていて当然ではないでしょうか。使徒聖パウロが述べるキリストの来臨は、マリアの場合、例外的に、(直ちに)すなわちこの世での生活を終えた途端に実現(すべき)ことではなかったのでしょうか。繰り返しますが、ベトレヘムでのあの夜、イエズスが始めてナザレトにおいでになるのを可能にしたマリアにとって、死が免除されることは当然ではなかったのでしょうか。私たちの場合、地上での生活の終りは死と呼ばれますが、マリアの場合、それは伝統的に眠りと呼ばれています。

「マリアは天にあげられ、天使は歓喜し、教会は大いに喜ぶ。」

＊＊＊

私たちにとって今日の祝いは過越つまり主の復活と昇天の続きのような気がします。それはまた、永遠の生命と将来の復活への希望のしるしでありその源でもあります。ここで言うしるしについて、ヨハネは黙示録の中で次のように書いています。

「それから壮大なしるしが天に現れた。太陽に包まれた婦人があり、その足の下に月があり、その頭に十二の星の冠をいただいていた。」(黙示録12・1)

今日、私たちは救いの計画の壮大なしるしを深い信頼と大きな喜びをもって眺めることができます。(…)キリストに人としての体を与えた御方、天に昇られた無原罪の聖母、聖霊の花嫁、私たちの母である御方を心から称えましょう。

(八・十五)

聖ペトロ・聖パウロ

「あらゆるときに主を祝せよ、主への賛美はいつも私の口にある。」(詩篇34(33)・2)(…)

他の機会に教会は、ペトロとパウロを別々に記念しています。例えば1月25日は「パウロの回心」を記念し、2月22日には「ペトロの使徒座」を祝います。

今日は二人一緒に典礼で敬う日です。二人は教会中で敬慕されていますが、ローマでは特に厳かにこの使徒たちを記念します。というのも二人とも、ネロ帝政下にローマ帝国の首都で殉教の苦しみを受けたからで

す。

今日の典礼は特別の二重唱です。ペトロとパウロが時を同じくして、「あらゆる時に、主を祝せよ、主への賛美はいつも私の口にある。私の魂は主において誇り、小さき者はそれを聞いて喜ぶ」(前出2～3)と称えています。

使徒は私たちを歓喜にいざないます。しかし、ペトロは十字架の上で、パウロは刃によって、死を迎えます。死が待っているにも拘わらず、二人は愛に満ち、人間愛にあふれ、勇敢に進みます。「私は心痛から助け出された」(前出5参照)

二人にとって最後の証言をする恩寵の方が、死の恐怖よりもはるかに勝っていたので、(愛は恐怖を追い払うのです。)二人はたえず神を称えつつ邁進します。人間が加えた恥辱に満ちた刑罰も死も、彼らが見た神の光を曇らせることはできません。「私の魂は主において誇る」のです。神の栄光の前には、あらゆる人間の力も傲りも無力となり果てます。

このようにしてキリストの使徒たちは死へと赴きます。二人とも、その昔、主が近づき、主の恩寵の働きが完遂されたことを知っていました。

ペトロにとっては、フィリッポのカイザリア地方での出来事でした。ペトロはそこで「あなたはキリスト、生ける神の子です」とキリストへの信仰を告白しました。(マテオ16・16)彼の口と心から出たこの信仰告白は実は彼自身のものではありません。「その啓示は血肉からのものではなくて、天にます父から出たものである」と主が言われる通りです。(前出17)

このようにペトロの告白に答えられたキリストは、続けて言われます。「あなたはペトロである。私はこの岩の上に私の教会を立てよう。地獄の門もこれに勝てぬ」と。(前出18)

ヨナの子シモン、燃えるような信仰心を持ちながらも、救い主の受難の時にみられたような優柔不断なところのあるペトロにキリストはこう語られました。

弱いペトロではありましたが、御父が心に刻まれた言葉のおかげで、ペトロはいつまでも主を否み続けることが出来ず、戸外で激しく泣きました。心からの完全な痛悔の涙であったのです。

キリストはペトロの痛悔を受入れ、ペトロは再び愛を持つことができたのです。キリストは、「主を愛している」、他の誰よりも主を愛していると、ペトロが告白するのを許されました。同時に、すでにフィリッポのカイザリアでお与えになった命令、「私の羊を牧せよ」を再確認されたのです。

キリストがかつて十字架上で生命を捧げたように、自分が羊(人々)のために自らの生命を投じた時、ペトロの胸の内に、今までの全ての出来事が甦ってきたに違いありません。

詩篇の言葉を使って典礼はこのことをよく表しています。

「私が主を求めたとき、主は答えられ、私は心痛から助け出された」(34(33)・5)

ペトロが兄弟たちのための奉仕を始めた頃のヘロデ王の治政下では、エルサレムはひどい恐怖に包まれていました。死刑は、民を喜ばせるために行われ、ペトロは囚人として鎖につながれ、監禁されていました。(使徒行録12・1以下参照)

その時、声が聞こえてきました。「早く起きなさい」「帯をしめて履物を履きなさい。」「がいとうを着て私についてきなさい。」(前出12・7～8参照)鎖ははずれ、ペトロが番所を過ぎると、町の門は自然に開いて、(前出12・9～10参照)「ヘロデの手から、私を救い出してくださった」(前出12・11)のを知りました。

ペトロは、エルサレム、アンティオキア、そして最後にはローマへと続く長い道のりが残っていることを知りました。

「主は、私を心痛から助け出された。悲しむ者が呼びかけると、主はそれを聞き、すべての恐れから救い出される。」(詩篇34(33)・5、7)

何年かが過ぎ、ローマで十字架にかけられようという時、ペトロの脳裡には、主に導かれたこの長い道のりがよみがえります。

ペトロは、当時のキリスト者に、そして私たちにも語りかけているようです。「主を見上げよ、そうすれば光り輝き、あなたたちの顔は恥辱を受けまい」(前出34(33)・6)と。

彼は喜びにあふれて死に赴きます。人間にできないことが、神にはおできになります。教会は、死に赴く時の、神にたどりつく最後の道のりを歩む時の、使徒の心の内なる神秘を詩篇の中に読み取ろうとします。

この神秘、このペトロのメッセージに照らしあわせて、私は心から崇敬する皆さんのことを考えています。

首都大司教に任命され、これから聖なるパリウムを受けられる皆さんのことを考えています。

ペトロの墓の近くでパリウムを授与されるということは、裁治権が委ねられるということの他に、ペトロの後継者との特別な一致の絆を示します。教皇は教理と信仰、規律、司牧活動における一致の基ですから。

今度は、パウロの姿に目を向けましょう。主がパウロのもとに現れ、復活の秘義の輝きで目をくらまされた時のことを、パウロは片時も忘れませんでした。キリストの弟子たちが復活の秘義を宣言し、告白していたので、タルソのサウロは彼らを牢に入れ、また殺させました。ダマスコへ行く時も同じ意図をもっていたのです。

その時パウロは「なぜ私を迫害するのか」と尋ねる声を聞きました。

主は彼の近くにおられました。サウロは、復活された主の栄光の輝きが見えませんでした。目が見えなかったのでパウロは、「主よ、あなたはだれですか」と尋ねることしかできませんでした。「私はあなたが迫害しているイエズスである。」(使徒行録9・5)

どうするのをお望みですか。

この時からパウロは、主の言われるままに行いました。「主はそばにあって私を強めてくださった。それは私によって宣教が全うされ、すべての異邦人にそれを聞かせるためであった。」(ティモテオ②4・17)

その通りになりました。そして、パウロの疲れを知らぬ宣教は、ローマで頂点を迎えます。

「私が注ぎのいけにえとして注がれ、帆を張って去るべき時はもう近づいた。私はよい戦いを戦い、走るべき道のりを走り尽くし、信仰を守った。」(前出4・6～7)

パウロは「正義の冠」が正しい審判者である主によって与えられるだろうことを確信します。実際、彼は主の「現れを愛した」(前出4・8参照)最初の人です。

タルソのパウロよ、何という愛の深さ、みごとな生涯の捧げ方、何の見返りもなく犠牲を払うその高潔さ。

詩篇の言葉を使って、典礼はペトロとパウロ、パウロとペトロという素晴らしい二重唱に招きます。

良き牧者に倣って、羊(人々)のため命を投げだしたその日、ペトロとパウロは天からの力に囲まれました。詩篇では「天使は主を恐れる人人のまわりに陣を張った」(34(33)・8)と高らかに歌われています。

主はあらゆる心痛から助け出されました。

全き愛は恐れを追い払います。

彼らは最後まで信頼した主の御許に行きます。

「主の慈しみを見つめ味わえ、主に逃れる者は幸せ。」(前出34(33)・9)

ペトロとパウロは殉教の時、傍にいた人々にこのように語ったと思われます。そしてその言葉は、幾世紀幾世代を経て続いています。

彼らの証言は残っています。キリストは、この証言を基礎にして教会をたてられ、「地獄の門もこれに勝てない」のです。(マテオ16・18参照)

(八九・六・二九)

「召しだし」(再版)
ホセ・ルイス・ソリア著
新田壮一郎訳　定価七〇〇円

説教・講話・書簡等の抄訳

若い皆さんの活躍に期待したい

〔復活祭当日、教皇様は聖ダマソ広場で数千名の大学生たちと話をされた。学生たちはユニヴの参加者で、枝の主日に聖ペトロ広場で行われた世界青年日のミサや聖週間の行事にも参加した。〕

「私の希望、キリストは復活された。」

親愛なる若者の皆さん、この言葉は復活の主日の典礼がマグダラのマリアに語らせ、また（復活の）八日間中、教会はこれを繰返し唱えます。

「私は確信している。キリストがまことに復活されたことを。」

主の復活は、主につき従うという固い決意を新たにした使徒と弟子たちに衝撃を与え、自らその証人となった神の救いの計画を全ての人々に確信をもって告げ知らせ始めたのです。世界は、神の偉大な業（使徒行録2・11）をあらゆる言葉で知りました。キリストの最初の第子たちと初代の信者たちは、キリスト教的な徳の美しさを人々の間で広め、生活の中で英雄的にそれらの徳を生きました。彼らは世を捨てたのではなく、自分が生活し働いている所で、復活されたキリストへの希望を率直に証明するよう、神に召されていると感じていたのです。

尊者ホセマリア・エスクリバー師の言葉を借りてこう言えるでしょう。「他に道はありません。毎日の生活に主を見出すか、あるいは主を決して見出せないか。」(Colloqui 114) 主は多くの人を司祭職や奉献の生活に召し続けておられます。しかし、いつの時代も同様に、今日も、大多数の男女が工場や病院、大学やスポーツ界、その他正直な仕事ができる全ての分野において聖なる者となり、神に仕えることを望まれています。

「キリストはまことに復活された。」

この知らせを聞くと、キリストを発見し、世の救いのために自己を捨てても主に従って生きることの価値を見抜けなくしていた恐れやためらいは消え去ります。「私は門の外に立ってたたいている。私の声を聞いて戸を開くなら、私はその人のところに入って彼とともに食事」するだろう。(黙示録3・20)　神は私たちの自由と要求を尊重なさいます。そして神は、人の心を開くために、地上での私たちの協力を必要とすることを望んでおられます。多くの人が、キリストは自己の自由に対する脅威であり、自己の飽くなき幸福追求の障害であると考え、自分の殻に閉じこもったまま生活しています。けれども私たちは、今もそして永遠に、真に自由になり、完全に幸福になる唯一の道は、キリストに心の扉を開くことにあると知っています。(サムエル上3・5)

皆さんが属人区オプス・デイのセンターで提供される形成を受け、社会で仕事を通して真剣にキリストを探し求め、キリストを愛そうと努力していることを私は知っています。今日、教会は深い生き生きとした霊的刷新を特に必要としています。ここに集っている皆さん全員が、この刷新の熱烈な協力者となることを期待しています。聖ペトロの後継者のこの期待を裏切らないでください。あなたたちに対する神の信頼を裏切らないでください。

多くの同僚と共に勉強し、働くことによって、この喜びあふれる知らせの伝達者となってください。皆さんの友情を通して全ての人が、キリストを信仰することの美しさを発見できるよう手助けしましょう。皆さんの生活全体が、キリスト教的徳の魅力的で誠実な模範となりますように。快楽主義的、物質主義的な文化によって忘れ去られたり、笑い物にされたりするようなことがあっても、それらの徳の一つでさえ決して排除しないようにしてください。皆さんの同僚が、世界が特に必要としている連帯の大切さを学ぶことができますように。キリスト教的な純潔に生きる誇りを持つべきこと、処女性童貞性のすばらしい賜を愛すべきこと、消費主義に浸り切っている世の中にあって節制と離脱の価値を益々評価すべきことを力強く呼びかけてください。皆さんの友達が、キリストの深い愛を感じとることができるように、御聖体の秘跡の中に在す主を受けるため赦しの秘跡に近づくよう手助けしましょう。

今年のローマの集いも終りをむかえます。私は、神の国を拡げるために皆さんを頼りにしています。また、私自身と私の協力者の仕事のために皆さんが捧げる祈りに支えを求めています。

復活された方の御母マリアに、私がペトロの後継者と教会の牧者、神の民全員に、復活の秘義から出る力を与え続けられるよう忍耐強く頼んでください。

「そうです。私は確信している。キリストはまことに復活された。」

皆さん全員に、祝福を送ります。

（八九・三・二六）

◎「拓」

ホセマリア・エスクリバー著
新田壮一郎訳　定価一六四八円

罪は人間と神との契約を破る

「罪」シリーズ❼（つづき）

不従順としての罪

5 聖パウロはアダムの罪について語り、それを「不従順」(ローマ5・19参照) と記しています。同様に人間の犯す「自罪」の全てに対してもそれは当てはまります。人間は神の掟に背いて罪を犯します。ですから、至高の立法者である神に対して「不従順」なのです。啓示にてらしてみれば、この不従順は同時に神との契約を破ることです。啓示から知り得た神は実際に契約の神であり、契約の神として神が立法者であることは明白です。事実神は人間との契約の中に主の掟を契約の根本的な条件として書き込まれました。

6 こうして、創世の書にあるように(創世2・3)、契約の中でまず初めに踏みにじられたものはあの原初の契約でした。これはモーゼの時代に主なる神とイスラエルとの関係においてより一層はっきりと現れています。シナイ山の麓で選ばれた民と交された契約（脱出24・3～8参照)は掟、つまり十戒(同20、第二法5参照)で成り立つものです。その掟は、神に関して、被造物特に人間に関して全ての人がとるべき態度についての根本的な、他人に転嫁することのできない原則を構成しているのです。

7 聖パウロのローマ人への書簡の教えによれば、これらの根本的かつ譲ることのできない原則はシナイ山での契約の文脈にも啓示されていますが、実際にはイスラエルになされた契約とは無関係に人間誰しもの「心に刻まれて」いるものです。使徒は次のように書いています。

「律法のない異邦人が自然に律法のおきてを実行するなら、律法がなくても自分自身が律法となる。彼らは自分の心にきざまれているこの法の存在を示している。それを証明するのは彼らの良心である。また、彼ら同士が相手に対してもつ非難や賞賛

不変の教え

の内部的な判断もそれを証明する。」(ローマ2・14～15)

従って、契約を背景とした律法の啓示によって神の手で強められた倫理的秩序は、たとえモーゼの律法と啓示によって示された範囲から離れたとしても、「心にきざまれた」法においてすでに効力をもっているのです。それが自然法であり、聖トマスがそれについて語る時(I-II, q91 a2; q94, aa 5-6 参照)極めて巧みに説明しているように、それは人間の理性ある本性そのものに刻みこまれているものだと言えるでしょう。この法の履行は人間の行為の倫理的価値を決め、その善性を保証します。反対に、「心にきざまれた」つまり人間の理性的本性そのものに刻まれた法を犯すことは、人間の行為を悪に定めます。それは悪なのです。なぜなら、創造主である神が隠れてまします人間の本性と世界との客観的秩序に敵対するのですから。

8 啓示された法にてらしてみると、罪の性質が一層明らかになります。神によって制定された明白で絶対的な法を犯していることを人間は強く意識することができます。だからこそ、神の意向に反することを承知しているわけで、その意味で〈不従順〉、つまり従わぬ態度をとるのです。それは単に観念的な行為の原則に対する不従順という場合だけでなく、神のパーソナルな権威が明確に示されてある原則に対する、すなわち神の知恵と摂理の示す原則に対する不従順でもあります。道徳法全体は創造された世界の善を思い、特に人間の善を思う心遣いで神がお与えになったものです。アダムと結ばれた最初の契約においても、モーゼを通してのシナイ山上での契約においても、また最後に、キリストにおいて啓示されその贖いの御血において封印された最終的な契約においても(マルコ14・24、マタイ26・28、コリント①11・25、ルカ22・20参照)神が記されたのは明らかにこの善のことなのです。

9 これを背景にして考えると、法に対する〈不従順〉の罪は神御自身、立法者であると同時に愛する父にています神に対する〈不従順〉であることが、さらに明白になります。このメッセージは、すでに旧約聖書の中に(ホゼア11・1～7参照)示されていますが、放蕩息子のたとえの中に(ルカ15・18～19、21参照)明確に述べられているのがわかるでしょう。この神に対する不従順、神の創造せんとする意志、また救わんとする意志に反対することは、『自分の完成を神のほかに求める』人間の欲望を含めて、〈自由の乱用〉に他ならないのです。(『現代世界憲章』13)

不信仰としての罪

10 受難の前日に、イエズス・キリストは聖霊が「この世に悟らせる」に違いない罪について語り、「私を信じないから」(ヨハネ16・9)という言葉でこの罪の本質を説明なさいます。神に対する「不信仰」は人間が契約の神に背いて犯す罪の最初にして基本的な形です。この種の罪は、創世の書第3章で語られる原罪ですでに明らかにされています。シナイ山上での契約で与えられた律法もこれに言及していますが、それはこの形の罪を退けるためなのです。「エジプトの地、奴隷の家からおまえを連れ出したのは、神なる主、私である。私以外のどんなものも神とするな。」(脱出20・2～3)　高間でのイエズスのお言葉と福音書全体、新約聖書におけるイエズスの言葉もまた、これを意味しています。

11 この不信仰、創造主、父、救い主として啓示された神への信頼の欠如は、罪を犯すことによって人間が掟(律法)に背くばかりでなく、神に〈対立〉して「自分の完成を神のほかに求め」ているということを指摘しています。このようにみると、全ての自罪のいずれにおいてもその根源には不信仰の反響があることがわかるでしょう。それは、最初の罪のもととなった言葉、すなわち神に対する不従順を神のようになる、神のように〈善と悪〉を知る方法として示した試みるもの――サタンの言葉の(遠いかもしれないが)こだまであることは確かです。

しかしすでにみてきたように、自罪においても罪(死罪)の場合には人間自らが神との対立の道を選択するのだということです。放蕩息子が愚かな冒険の始まりにしたように、人間が創造主の代りに被造物を選び、父の愛を拒絶するのです。人間の罪はいずれも全てある程度まで、あの〈罪の神秘〉(テサロニケ2・7参照)の一つの現れであり、これを聖アウグスチヌスは「神をあなどる程の自己愛」(『神国論(神の国)』XIV 28, PL 41, 436)という言葉に要約しています。

(八六・十・二九)

今朝、私は四十七名の司祭叙階を司式する喜びを得ました。神の特別の賜物を受けた新司祭のみなさんに心からお喜びを申し上げると同時に、按手を受けた彼らが恩寵を最大限に活用し、キリストの体である教会に役立つ実を結ぶため一所懸命努力してくださるよう、強くお勧めしたいと思います。司祭が自らのうちで働く聖霊の勧めに素直に従うなら、沢山の実を結ぶことができます。

確かに司祭職はキリストの名において行使されますが、実は聖霊の御働きなのです。救い主が人類に与える御自らの聖性と生命は、聖霊を通して与えられるからです。叙階の時、司祭に司祭職を果すちからを与えるのは聖霊の賜物のおかげなのです。

司祭と聖霊

次回のシノドスで検討される司祭の形成とは、霊の役務者(コリント②3・6、8参照)の育成ということになります。司祭になろうと望む人は、聖霊に一致した生き方と振舞をする習慣をつけなければなりません。司祭の育成とは、教会に奉仕するため最初の聖務者を叙階するとき聖ペトロが要求したように(使徒行録6・3参照)、「聖霊と知恵に満ちた」人を育てることです。

司祭は固有な役務を果すにあたり、聖霊の働きかけと光を必要とします。宣教するとき、伝えるべき教えの意味をよく理解し、それを聞き手に合わせて忠実に言いあらわすために聖霊の光を乞い願わなければなりません。聖体祭儀を祝うとき、司祭は聖霊を呼び求める祈り(エピクレシス)を唱え、パンとぶどう酒がそれぞれキリストの御体と御血に変り、聖体の宴が効果を発揮するよう願います。司祭は、すべての聖性の源である聖霊の影響のもとに諸秘跡を授けます。教会共同体を導く牧者の役目にしても、司祭が聖霊の導きに自らを委ねないかぎり果すことはできません。

というわけで、賢い司祭は自らの才能に頼らず、人々の心にキリストの生命を伝えるため司祭のなかで働く聖霊の隠れたちからに頼ります。司祭個人の計画やプログラムや努力が実を結ぶのは、聖霊の目に見えず、時には予想すらできぬ、しかし常に最高の影響力を受ける場合だけです。

聖霊の働きを支えとして司祭職を行使するならば、同僚の司祭たちとキリストの共同体の全メンバーの中で働く聖霊を認め、敬うことができるようになるでしょう。

聖霊の導きに心を開いたマリアに向い、教会のためほんとうに聖霊に導かれた大勢の司祭を育ててくださるよう願いましょう。(九〇・六・十)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393